

コラム

メイク・ア・プロフィット

最近、FONTANA 著の Corrosion Engineering という教科書を読んでいたら、「企業とは鉄鋼、自動車といった「もの」を作るのではなく、利潤を創り出すのが目的である。投資にはそれに見合った利潤を上げなければならない。もし、余り利潤が上げられなければ、資金は銀行に預けて利子を得た方がよい。」といったことがあった。なるほど、これが米国人の考え方であり、かつ、最近日本でもブームの財テクの原理か、といたく感銘をうけた。しかし、落ち着いて考えてみると、その前半の考え方には一理あるものの、後半は非常に短視眼的な考え方に思える。人類のためには、少なくとも物質文明の発展という観点から見れば、良質かつ安価な「もの」が豊富に手に入ることが重要なのであつて、たとえいくら貨幣を持つていても買えるものがなければ、それは単なる紙切れに過ぎない。また、今日の日米経済摩擦の原点もそこにあるように思

われる。すなわち、米国では、企業が財テクに走り、自国での「もの」の生産に力を入れなかつたために、工業生産で日本に遅れをとり、輸入超過にならざるを得なくなつたということであろう。最近、日本の企業もその轍を踏もうとしていることは誠に残念に思われる。

しかし、我々技術者は、そのような経済体制に関する検討や対策は経済の専門家にまかせるとして、やるべきことはほかにあるように思われる。それは、新製品や新技術の開発によつて、財テク以上の利潤を上げるということであろう。私も、新プロセスの開発に少しはお役にたとうと、日夜研究にはげんではいるが、これまで、そのようなことにまで考えが及ばなかつた。これからは財テクを競争相手とし、よりいつそう努力していかなければならないと、気を引き締めるしだいである。

(豊橋技術科学大学 生産システム工学系 川上正博)

お知らせ

「鉄と鋼」埋草記事投稿のお勧め

本会会員はどなたでも会誌「鉄と鋼」にコラム、統計等の埋草記事を投稿することができますので、振るつてご投稿下さるようお勧めいたします。

埋草記事は会誌の解説、論文等の余白ページに掲載いたします。

(埋草記事) コラム、統計等

特に記事内容の定義はいたしません、何らかの形で本会会員に関心をもたれる内容であるものとします。

(記事の量) 所定の原稿用紙2枚(1000字)程度(会誌刷り上り1/2ページ程度)

(記事の掲載) 記事の掲載に当たっては、和文会誌分科会で査読をいたします。従つて、掲載にふさわしくないと判断された場合は返却することもありますのであらかじめご了承下さい。

なお、採用された記事については薄謝をさしあげます。

掲載された記事の中から、和文会誌分科会で優秀作品2~3件を半年ごとに選考し、埋草賞をお贈りします。

編集後記

2月号をお届けします。本誌を繙かれる頃は寒さも一段と厳しいことかと思ひます。

さて、インクの香も新しい「鉄と鋼」を手にとられて、あなたは一番にどの記事をお読みになりますか。解説記事、技術資料、論文、談話室、海外だより、コラム(埋草記事)、あるいは会告の黄色のページでしょうか。意外に読まれているのが談話室、海外だより、コラムや会告で、また意外にも読まれていないのが論文かもしれません。一説によりますと1論文当たりの読者は5~10人とか。論文を書いて5~10人の方に私信に代わり約12000部の発刊で答えるのでありますから、これまた痛快です。

さて、会員の皆様にあまり知られていない耳よりのニュースをお知らせします。コラムを書いて埋草賞を狙いませんか。講演論文集(材料とプロセス)の3冊

分に匹敵する図書券がいただけます。半年ごとに3件程度の割合で、機知に富んだもの、ユーモア溢れる記事に埋草賞が贈られております(編集委員会で決定し、公表はされません)。

次に、編集委員会で議論が活発になされるのが論文題目です。題目の決定にあつては、細心の注意が必要ということです。本誌で認められた新しい学術用語はその後、独り歩きします。新しい学術・技術には今までになかつた概念が含まれ、したがつて新しい用語がそこに創造されることとなります。外国語を翻訳した学術用語ばかり用いるのではなく、本誌を母体にして、世界を独り歩きする新しい用語の登場が望まれます。それには会員の皆様の独創的研究と編集委員会の勇気ある決断が不可欠でしょう。(S. A.)